

Title	E・V・ シュナイダー著『産業社会学』
Sub Title	Schneider, E.V. : Industrial sociology, 1957
Author	十時, 巖周(Totoki ,Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1958
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.31, No.2/3 (1958. 3) ,p.86- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19580315-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

知性ある人にあつては、無反省な權力要求と貫徹意思が衝動源と看做され、才能の低い者にあつては、虚榮心がそれである。環境は才能があるが情操に乏しい人においては、才能の低い者におけるよりも有利である(一三四頁)。

このグループは豫後には向いていない。特別な施設に收容することを要する。

第三のグループに属する児童、この連中は累犯者にならない場合でも、機會犯になる危険性はある。この者が、たとえ不充分であつても教育的指導になじむ可能性があるということは重要である。

著者も告白しているとおり、本資料はたしかに數的に限られたものであつて、結論といつてもこれは確言をはばかるものであろう。

しかしともあれ、ケース研究として、精神病理學の俊才が着實に積み重ねた資料であるだけに、この範圍内では信頼しかつ高く評價しうるであらう。本書の中で一應二次的に考えられた社會學的考察、その實證的研究と相まつて、刑事學は一層實り多い寄與を受けるものと思うが、現在のドイツ刑事學、特に犯罪社會學がこの課題に満足のいく解答を與えてくれるかどうかについては筆者は悲觀的である。ドイツ社會學自體がその任にたえるかどうか危惧にたえない。というわけは、ドイツ社會が一體マスを基調とした動的な社會であるのか、そもそも近代社會という範疇に入りうるのか極めて疑わしいからである。社會變動、文化格差といった問題が意識できない状態にあつて、動的な考察が發達しうるわけがないからである。

ともあれ、本書は現在のドイツ犯罪生物學の水準の一端を示すものとして、紹介の價值あるものと考ええる。筆者は、幸にして著者の

下で親しく教えを受けられる状態にある。しばらくは耳を傾けていよう。批判はいつでもできることであるから。

——一九五七・一一・一五、ハイデルベルクにて稿了——
(宮澤浩一)

Schneider, Eugene V.:

Industrial Sociology
The Social Relations of Industry and
the Community. 1957, 559 pp. (McGraw-
Hill Series in Sociology and Anthropology)

E・V・シュナイダー著

『産業社會學』

(一)

産業社會學とよばれるようになった新しい研究領域の系譜は、一般に、ハーバード學派のいわゆる「人間關係論」にさかのぼるものといわれている。その意味で、産業社會學はインフォーマル・グループの研究によつてはじめられ、この種のトピックによつて、初期産業社會學者の多くは催眠状態に陥つたともいわれている。彼等は、經營組織における小集團の研究をはじめ、經營組織の改善、人事擔當者の訓練、従業員的面接治療等、現實の經營方策とタイアップした種々の事例研究に没頭した。それら諸研究の或る種の成果

は、アメリカにおける新しい經營技術として次々に採用されることになったが、他方、かかる調査研究の經營者的偏向は、各方面からの痛烈な批判を浴びるにいたつた。

産業社會學をめぐる社會諸科學からの諸論争によつても理解されるように、初期産業社會學の致命的な缺陷は、ハーバード學派の事例研究法、或いは、臨床科學的應用科學の方法に内在したものと云つてよく、科學としての方法論的基礎づけを缺く、試行錯誤的な事實發見主義、安易な調査萬能主義に、初期産業社會學の根本的な弱點がみられたのである。

そこで、産業社會學の次の問題は、この研究領域に關する體系的な方法論的考察に移行するわけで、その後、この問題に關する幾多の諸見解が明らかにされたが、本書も、以上のような背景のもとに出版された、産業社會學の新しい理論書といふことができるであらう。

著者シュナイダーは、かつてハーバード大學社會關係學部に在籍し、同學部主任教授パースンズの指導のもとに、修士號および博士號を同學部より取得している。

パースンズについては改めて紹介する迄もなく、今日、理論社會學に關心をもつ誰しもが必ず注目しなければならない著名な理論家の一人であり、その有名な「社會システム」理論とともに、廣くわが國に知られていることは周知の通りである。パースンズ理論に強い親近性を示す著者によつて、産業社會學の新しい理論體系の展開が試みられたことは、バルソニヤンたるとその如何にかかわらず、また、産業社會學に關心をもつとその如何にかかわらず、社會學理

論に注目する全ての人々にとつても、同様に興味深い問題を投げかけるといえるであらう。

(二)

本書は、主として二つの目的のために構成される。第一は、現代大規模産業の社會構造、および、それらと社會との諸關係を記述すること、第二は、産業社會學その他の學問領域における既存の諸調査研究を、一つの理論的枠組に組織化することである(Preface)。

以上の目的達成のために、本書は、社會システムに關する動態的分析を可能ならしめるような、構造機能的社會理論を展開しようとする。すなわち、産業を一つの社會システムとしてとらえ、そのシステムを體系的に記述、分析しようとする社會理論を構成し、なおかつ、從來の個々の諸研究をも組織化しうるに足る社會理論を用意しようとする。

本書の研究對象は、主として、アメリカにおける大規模組織の生産工場に向けられている。世界を滔々として風靡する「産業技術化」の恐るべき影響方——とりわけ、われわれの物理的環境をはじめ、政治制度、家族制度その他のあらゆる社會制度、さらには、われわれ自身の價值觀、理想像、生活目標等のパースナリテイの内にまで滲透してくるその恐るべき影響力——に注目しようとする「問題意識」が、本書をして大規模産業の解明に向わしめた底流をなしている。つまり、今日われわれが當面しているところの複雑な社會的諸問題は、全て産業技術化の現象と密接に關連しており、すでに常識的な知識ではおしはかれないほど、極めて複合的な様相を呈して

いる。この點に科學的な分析のメスを入れようとするのが、本書の狙ひの一二であるわけである (Chap. 1. Introduction)。

本書は、四部門、二十章よりなる。

第一部《Social Theory and Productive Systems》では、本書を導く社會理論の主要概念——役割・ノースナリティ・緊張——に關する理論的明微化が試みられ (Chap. 2. Industry and Sociological Theory)、産業の動態的性格を把握するための歴史的・バーベクティブが用意される (Chap. 3. Types of Productive Systems, Chap. 4. The Development of Industry in the United States)。

第二部《The Social Structure of Industry》では、大規模産業組織の社會構造が分析され (Chap. 5. The Industrial Bureaucracy)、その組織のもとにおける諸個人と組織の關係が分析される (Chap. 6. The Executive in the Industrial Bureaucracy, Chap. 7. "Minor" Roles: The Specialist, the Office Worker, the Foreman, Chap. 8. The Role of the Worker: Industrial Production and the Worker's Role, Chap. 9. The Role of the Worker: Social Relations at Work)。

第三部《The Social Structure of Trade Unionism》では、以上の社會構造、社會關係から如何に勞働組合運動が發展し (Chap. 10. Development of Trade Unionism in the United States, Chap. 11. Contemporary American Trade Unionism)、その機能しつつあるかを明らかにしようとする (Chap. 12. The Function of Unionism: Unionism as an Instrument of Power,

Chap. 13. The Function of Unionism: Collective Bargaining, Chap. 14. Theories of the Labor Movement)。

第四部《Industry and Society》では、以上の産業現象が、地域社會 (Chap. 15)、社會階層 (Chap. 16)、少數異民族 (Chap. 17)、家族 (Chap. 18) と如何に關連しているかを記述し、産業技術主義と政府 (Chap. 19) および社會變動 (Chap. 20) の關連に注目しようとする。

以上の構成を瞥見することによつても理解されるように、本書は、産業社會學の一應の全ての問題領域を包含しており、その限りにおいては、これ迄の概論書と大差ないであらう。

しかしながら、各問題領域の取扱ひ方に關して、如何なる理論的體系が首尾一貫して展開されるか、つまり、バルソニアンの立場における産業社會學理論の組織的展開方法に、われわれの注意を喚起しなければならぬのである。

そこで、本稿においては、本書の老大な全貌を紹介することよりも、むしろ、その理論構造に關連する限りにおいて、理論社會學と特殊社會學との關係を究明してみたいと思う。そうすることによつて、目下の産業社會學が直面している中心課題の若干の諸側面を明らかにしたいと思うのである。

(三)

著者が本書において用いる基礎概念は、役割・パースナリティ・文化および普通化的ゴールの諸術語から構成される「社會システム」の立場によつて貫ぬかれてゐる。

社會システムの解明に關しては、いわゆる「構造機能的社會理論」を用いると指摘されているが(二〇頁)、その場合の構造機能的理論は、パースンズの意味における「體系理論」であるのか、或いは、マートンの意味における「體制—中間範域理論」であるのか、まずその點を吟味しておく必要がある。というのは、「システム」をめぐる「體系」と「體制」の解釋上の論議に重要な理論的意義が認められる現在、本書に關しても、その點についての主張を明白にしておかねばならない。さもなければ、以後の論議を混亂させる危険に陥るものと考えられるのである。

前者における「システム」の意味は、社會的・文化的・歴史的環境から相對的に獨立的なもの、システム自體の變化はシステム内行為の相互作用によつてつくり出されていくところの限界維持的なもの、として一般に抽象的・普遍的概念圖式として把握されている。

後者における場合は、歴史的・社會的全體構造における諸問題を、その全體的關連の枠組において機能的に分析する際の、中間範域的な具體的・個別的分析圖式として考えられている。

さてこの點に關する著者の考え方は、前述の諸術語の解説にあつてパースンズ説を多く引用するとともに、例えば、「役割構造化の方法に關するパースンズの考え方にそのまま従うものではないが」(二三頁索引部)といいながらも、その全體的骨組においてはパースンズ理論の要約以上に出るものではない。さらに、中間範域理論に關しては、中間範域的諸特殊研究の専門化に伴う弊害を指摘することによつて(五頁索引部)、自己の理論的立場を明らかにしている。つまり著者の立場は、明らかにパースンズの世界のそれに該當する

ものと考えられるのである。従つて、本書の主要分析方法として用いられるところの「役割とパースナリティー間の分裂」にしても、その觀點からする「社會解體現象」の取扱ひ方にしても、その基本の方針は、パースンズ理論の産業現象に對する組織的展開とみて差しつかえないであらう。

ところで、パースンズ理論について一般に指摘されるところであるが、かれの概念圖式は論理的抽象的組立に終始し、現實の調査を導くものとしては必ずしも妥當ではないといわれる。いいかえれば、具體的經驗現象を解明するための手がかりとなるよりは、むしろ、經驗とは關連しない精緻な抽象的論理的構成體の設定に向つてゐるのである。

このようなパースンズの體系理論は、産業という極めて複合的な具體的現象に投入される場合、當然、或る種の操作的な手續を必要とすることはいう迄もない。もともと「體系理論」は、「體系」の理論であつて、産業その他の具體的現象に關する「理論」の體系ではない。従つて「體系」と「體制」との對立點を克服するような、或る種の論理的操作が必要とされるのである。

この點に關し著者は、「役割・パースナリティー」分析法を現實に投入する際に、現實そのものに關する歴史的パースペクティブを試みる。パースンズ理論における歴史性の缺除が批判されているのに對し、このことは大いに注目して然るべきであらう。パースンズは、その「行為理論」の展開において、社會システム、パースナリティー・システム、文化システムの三つの抽象化された「系」を設定し、それらは相互に相對的に獨立した次元のものとして取扱つてゐる。し

かしながら現實は、抽象的論理的に相互に獨立した三つの「系」に分離しているわけではない。むしろ現實は「行爲者の選擇を導き相互作用の型を制限するところの價值・規範・シンボルの組織」としての「文化システム」に具象性を與えるところの「個々の歴史的文化」によつて意味づけられているのである。この個々の歴史的文化は、具體的な個々の諸社會制度を規制し、それらの制度における個々の具體的諸役割に具象化される。従つて、現代の産業現象に關連する具體的諸社會現象を究明するには、「體系の理論」を、まず、歴史的展望のもとに現實の世界に組み入れる必要があるわけである。

著者は、人間の生産活動に關する史的展望を、(一)ギルド・システム、(二)プッティングアウト・システム、(三)ファクトリー・システムの三つのタイプにわけて考察する。それぞれのタイプにおける人間行爲の價值・規範・シンボルの相違を各段階の文化體制、社會體制の全體的關連のもとにおいて理解することは、現代のわれわれの生産活動に伴う諸社會現象の究明にも大いに役立つというわけである。つまり、歴史的展望によつて、現代産業社會の動態的性質を明らかにし、かつ、産業における諸發展段階の比較研究に關する資料を豊かにすることができるといわれている(七頁)。

著者はさらに、アメリカにおける産業の發展過程を回顧し、今日あるところのアメリカの産業狀況、それに伴う産業官僚主義の特性を見極めようとする。そして、かかる大規模産業のもとにおいて生産活動に従事する諸個人の「役割」を、その社會構造との關連において分析し、かつ、役割遂行とパースナリティの調和・葛藤の觀點から、再び、大規模産業における社會構造の問題を論じている。つ

まり、この場合の大規模産業に關する構造機能的分析は、歴史的潮流における一つの限界維持的なシステムを想定しており、その意味において、體系理論と體制理論との一種の折衷化を試みているものと考えられるのである。

著者は、本書の全般を通じて、同一の分析基準——役割・パースナリティ關連狀況——を用いることにより、本書の研究對象たる産業現象の組織的記述、分析を試みようとしているが、他方、同一基準を用いる場合の歴史的具體的状況の見透しに關しても、充分の理論的考慮を拂つていないものといつてよい。それは、體系理論における科學普遍性と、體制理論における歴史的特殊性とを合せもつ、新しい理論構造の展開を意圖したものと考えられるのである。

バルソニヤンが特殊社會學の領域に進出する場合、おおむね、著者のような理論構造を形成していくであろうことは、想像にかたくないところである。特殊領域における歴史的潮流を凝視しながら、それに独自の價值・規範・シンボルを探索し、それと相互に關連する具體的諸役割構造、パースナリティ類型を解明することによつて、その領域における社會的諸問題を具體的に分析することができるとの考えられる。その意味で、パースンズ理論の立場をとるものは、ひとたび現實の事態の解明に向う場合、すべて非パースンズ的な歴史的體制の世界に没入してゆかざるを得ないものといわねばならないであらう。「體系の理論」としての純論理的抽象的なパースンズ方式には、それ自體の科學的意義はともかくとして、經驗科學としての理論と現實の密着化をはかる場合、そこに全く異質的な一種の斷絶狀態がみられるものと信ぜられる。つまり、パースンズの意圖

する理論社會學と、特殊社會學としての産業社會學との間には、ふみ越えることのできない一線が劃されており、その點の斷層を著者は、歴史的文化における各文化の文脈を考慮することによつて處理しようとする。そうすることによつて、バルソニヤンとしての著者は、また、體系理論から體制理論により接近することにもなるのである。

次に、著者のこのような理論構造に由來する若干の問題點を明らかにしておきたい。

(四)

理論と調査研究は、一般に相互補完的役割を果すものといつてよい。理論的裏づけを缺く調査研究は、實證的調査の裏づけを缺く理論とともに、空しい一片の反古に過ぎないであらう。少くとも經驗科學としての社會學においては、このことは深く認識されなければならないところである。

従つて、「體系」の理論は、その社會的・文化的環境との關連において、すなわち、歴史的・社會的諸條件との關連においてとりあげられない限り、極度に抽象的・非現實的な理論に傾斜するであらう。

他方、「體制」の理論は、構造・機能的分析における全體關連的枠組の設定如何によつては、具體的には無數の諸體制が構成されるにいたり、理論普遍化の途に逆行する個々バラバラの諸特殊理論が築出することになるであらう。

前者に重點が置かれる場合、社會的諸事象は、あらかじめ豫定さ

れた理論の枠組に一方的に當てはめられることにより、すべてが一律に解釋されてしまうことになるであらう。すべての經驗的事實は、體系理論という一種の「整理ダンス」によつて、極めて組織的、かつ、強制的に整理され、現實との照合による理論の再構成は問題とならない。

後者に重點が置かれる場合は、體制規定の諸要因の構成に關する恣意性によつて、相對的に主觀的なものももの體制が設定され、そのいづれが現實において有意であるかは實證的調査研究にまつほかないであらう。

かくして、産業社會學に關する方法論的オリエンテーションは、兩者のかかる特性を考慮することによつて示され、著者が意圖した狙いもまた、この點にあつたものと考えられるのである。一方では、體系理論の最小限の枠組による既存の諸調査研究の組織化を試み、他方では、歴史的潮流における或る種の體制設定による現代産業の社會構造、社會關係の記述を試みている。しかも兩者の間には、文化の系と社會の系とを綜合的にとりあげようとする顯著な努力がみられ、そのことが成功しているか否かは別として、かかる點に本書の獨自の存在意義が認められるものと考えられるのである。われわれもまた注目しなければならない問題點であらうと思う。

しかしながら、以上の二つの理論型を止揚しようとする際における或る種の缺陷が指摘されることはいう迄もない。例えば、第四部「産業と社會」における平面的な記述、第三部「組合イズムの社會構造」に關する從來の諸見解の平板的な解説、さらに、産業技術化主義の進展に伴う社會變動の项目的な取扱ひ方、等は以上の缺陷の

證左として指摘されないであろうか。特に、われわれが深く追求していかねばならない社會變動の問題に關しこの點の分析に缺けるところの多いのは、パースンズ理論における變動分析の脆弱性と一脈の關連があるように思われるのである。

それはともかくとして、本書は、新しい産業社會學の體系化に關し誠に注目すべき見解を披瀝している。その意味で、この種の類書には異例の書といふべきであろう。また、全ての問題領域をソツなく取りあげた、極めて優れた概論書としての價值も否定できないところである。この領域に關する諸研究が、いまなお、いわゆる「人間關係」の技術的解説に終始している現在、改めて問題の所在を明確にするために、廣く一般の人々にも讀まれて然るべき勞作であらうと思う。(一九五八・一・二七)

(十時嚴周)

中村菊男著

『明治の人間像』

——星亨と近代日本政治——

一

島田三郎の主筆した『毎日新聞』は明治三十三年十月から星亨攻撃をはじめ、同三十四年六月二十一日星がたおれるその日までほと

んど一日として攻撃のペンをとめなかつた。それは星派の市參事會員數名が、三井鉛管製造會社を強請して、三千餘圓の賄賂をとつたという記事に端を發し、やがて『毎日新聞』の攻撃は星亨に集中し、「帝都の大汚辱！腐敗せる東京市會！醜魁は星亨！」「公盜の巨魁星亨」という初號の大活字は連日紙面に亂舞していた。

この事實を知つたのは數年前で、明治時代の社會主義者木下尚江について調べていたときのことである。というのはこの攻撃文を連日書きつづけた中心人物が木下尚江その人にはかならなかつたからである。『毎日新聞』は星が伊藤内閣から身をひいた翌日、すなわち明治三十三年十二月二十二日には「星亨降參せり！社會的制裁力！正義は勝てり！」と歡聲をあげ、星が刺客の手にたおれた翌月には「吾人は星亨其人の言動を攻撃する事、最も痛切にして、敢て其の正面の敵たることを辭せざりし者なるも、吾人は専ら平和の手段に依り、彼をして其の非行を改悛して正義の軍門に降らしむるを期せしに、今や刺客の手に斃るに至りしは吾人が切に彼の爲に悲しむ所なり。伊庭想太郎の心事は暫らく論ぜず、其の手段に至つては、吾人の全然取らざる所、吾人は伊庭が自ら進んで文明の大義に反するの行動を取りしを痛惜せずんばあらず。」(明治三十四年六月二十二日)という文をかかげた。

木下尚江のかかげた連日の攻撃文が、ついに伊庭想太郎をしてこの兇變をひきおこさせる原因となつた。このことに一番心をいためたのはほかならぬ木下で、この煩悶の種子は木下の心中深く植へつけられ、これが一つの原因となつて後年社會主義陣營から彼は後退したのであつた。ところでこの木下が星のたおれた半年餘り後に星